



(題字は初代学長 山田守英氏)

第 177 号

令和元年 12 月 27 日

編集 旭川医科大学
発行 教務部学生支援課



初冬の「白金青い池」

(写真撮影：病理部・病理診断科 谷野 美智枝)

教育・研究担当副学長に就任して	学生表彰式	12
副学長(教育, 研究) 西川 祐司…… 2	旭川医科大学基金「感謝の集い」を開催しました……	15
教授就任のご挨拶	学生団体代表者との懇談会を実施しました ……	16
生理学講座(自律機能分野) 入部 玄太郎… 4	ギター部・ジャズ研究会合同	
教授就任のご挨拶	クリスマスコンサート……	17
国際医療支援センター 本間 大…… 5	室内合奏団 クリスマスコンサート……	18
学部学生海外留学助成制度を利用して	ブラスアンサンブル クリスマスコンサート……	19
医学科第 2 学年 山形 美月…… 6	合唱部 クリスマスコンサート……	20
「高齢化対策モデル国」デンマークへの臨床留学	安否確認システムによる訓練を実施しました ……	21
医学科第 5 学年 小山 裕基…… 7	迷惑行為の防止について ……	21
学生海外留学助成制度を利用して	事故防止について ……	22
医学科第 5 学年 馬淵 ゆり…… 8	大学構内における駐車について ……	23
第66回北海道地区大学体育大会 結果報告…… 9	教員の異動 ……	23
令和元年度解剖体慰霊式を執り行いました ……	今後のスケジュール ……	24



教育・研究担当副学長に就任して

旭川医科大学
副学長（教育，研究担当）

西川 祐 司

この度教育・研究担当副学長を拝命しました。16年間離れていた旭川医大に10年前に戻ってきた私にとって、このような重責を担う立場に置かれるようになるとはまったく思いもよらないことでした。しかし、本学への想いは人一倍強いものがありますので、今後精一杯努力いたします。どうぞよろしくお願いいいたします。

私は本学の6期生として卒業し、病理学第一講座の故下田晶久教授のもとで大学院生として病理学を学びました。下田先生の後任として赴任された小川勝洋教授のもとで約5年間助手を務めた後、米国ピッツバーグ大学移植研究所のブライアン・カー教授の研究室で約4年半にわたり実験三昧の留学生活を送りました。その後、秋田大学医学部の榎本克彦教授の主宰されていた病理学講座で約11年半の間、教育、研究、診断業務に従事し、ほとんど秋田の人間になりかけておりましたが、ご縁があり、2009年11月に本学に帰ってまいりました。

医学の進歩や医学を取り巻く環境の変化に応じて医学教育は変遷を遂げ、私が教育を受けた40年近く前とはカリキュラムは様変わりしています。現在、医学科では2021年度から始まる新しいカリキュラムの編成作業が行われていますが、現行の2015カリキュラムにおける改善すべき点を洗い出し、学生の意見も取り入れつつ、より良い教育プログラ

ムを作り上げたいと思っています。このためには、教育センター、入学センター、医育統合センター、教育関連部会が互いに協力して、本学の医学教育、看護学教育のあるべき理想型を模索し続けることが大切であり、微力ながらそのための触媒役として貢献できればと願っています。また、先日日本医学教育評価機構（JACME）の審査で指摘された本学の医学教育プログラム上の問題点の改善についてもできるだけ早急に対応する必要がありますので、医学教育の理論的側面についてもっと主体的に勉強していく所存です。

確かに教育プログラムの整備は重要ではありますが、教育の目的はそれだけでは達成できません。本学の目指すところは、卒業時に求められる医師、看護師としての標準的な能力レベルを担保するにとどまらず、卒業後、将来にわたり研鑽を続ける頼もしい人材を輩出することではないでしょうか。私が本学に愛着を感じるのは、当時私たちを教育してくださった教養、基礎、臨床各科の先生方の思い出があるからに他なりません。開学間もない本学では先生方は教育にも研究にも真剣に取り組んでおられ、私たちはそのような先生方の背中を見て育ちました。私は通常の意味では勤勉とは言えない学生でしたが、生意気にも、どのようにしたら自分の力で先生たちのようにになれるだろうか、というようなことばかり考えながら学生生活を過ごしました。

まもなく開学50周年を迎える本学も大学らしい大学であり続けて欲しいのですが、そのためには教える側にも教わる側にも相応の覚悟が必要であることは言うまでもありません。

研究は教育と並び、大学の価値を決定する重要な活動です。日本では大学の研究力低下が深刻な問題となっていますが、本学の状況も例外とは言えないと思われます。人工知能(AI)が医学・医療に浸透していく時代においては、研究の意義を理解し、実践できる医療人の養成がますます大切になってきます。学生にリサーチマインドを植え付け、育てていくには、大学の豊かな土壌が必要です。教員それぞれが未解決の研究課題を抱え、解決しようと努力し、自由闊達な議論が行われて

はじめて、お互いを尊重し、尊敬し合える大学に育っていくものと思います。研究活動の活性化は教育レベルだけでなく、本学の医療レベルをさらに向上させることにもつながると信じています。本学の研究を支える基盤を整え、若手研究者や大学院生、教員の皆さんが気持ちよく研究できる環境を作り出すことに尽力したいと思います。また、学内、学外、海外研究者の交流や共同研究を促進するための方策が必要であると考えております。

今後、自分自身も教育・研究に取り組み続け、現場の視点から本学の教育・研究のあるべき姿を考え続けていきたいと思っております。皆様のお役に立てるよう精進いたしますので、ご指導、ご鞭撻をお願いいたします。



教授就任のご挨拶

旭川医科大学
生理学講座 自律機能分野
教授 入部 玄太郎

2019年10月1日付けで生理学講座自律機能分野教授を拝命いたしました入部玄太郎です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。私は旭川からは遠く、南国の鹿児島で生まれ育ちました。中高は鹿児島ラ・サール、1991年に鹿児島大学を卒業後も、これまでの人生で国内は大阪以北に住んだことがありません。原稿執筆時点でまだ着任してから日が浅く旭川での本格的な雪のシーズンを迎えていないため、もうすぐ来る白銀の世界に楽しみ半分、不安半分の毎日です。

私は大学卒業後、鹿児島大学医学部麻酔蘇生科に入局し、臨床の現場で8年間臨床麻酔と集中治療に従事しておりました。臨床麻酔の現場とは、生理学の知識に裏打ちされた秒単位の判断と行動が要求される場所でした。その経験から生理学、特に心臓生理に対する興味が大きくなっていき、遂には心臓生理学を専門分野とする研究者の道を歩むことになりました。

生理学の理解は解剖学と共に医師の基礎体力として非常に重要なのですが、いかんせん学生諸君が入学してから初めて接する医学専門教育であるからなのではないでしょうか、「医師になるために入学したのに、なんでこんな現場の医療と関係なさそうなわけのわからん勉強をしないとイケないのだ！」という憤りを持つ学生さんは多いような気がします。確かに受験勉強でやってきた勉強とはまったく異なる学問です。しかしそこで生理学の学習で躓いてしまうと後の臨床科目の学習効果にも大きく影響してしまいます。私は、生理学を日常的にフルに活用する麻酔・蘇生・集中治療医としての8年間の臨床経験から、優れた医療人の基礎体力としての生理学の重要性を肌で理解しているつもりです。私の臨床医時代の実体験に基づいた、生理学を正しく理解していたからこそ突破できた現場でのエピソードなどを講義・実習に盛り込むことにより、基礎医学が退屈な座学ではなく臨床の最前線で戦うための武器であることを十分に理解させることが基礎医学教育の使命であると考えています。

私の研究専門分野は心臓生理ですが、特に心筋細胞の機械感受性現象を研究対象としています。具体的には一個一個に単離した心筋細胞の両端を保持し、細胞に伸展などの様々な力学的負荷をかけた時の心筋細胞の長さや発生張力を測定し、同時に細胞内の様々な力学刺激誘発性の反応を観察するという手法をとっています。この心筋細胞機械負荷制御測定システムは世界的にも珍しい技術ですが、なぜ心筋細胞を引っ張るなんてみょうちきりんな研究をしているのですかと学生さんに聞かれたこともあります。なぜでしょうか。拡張期の心臓には血液が流入し、心臓を形成する心筋細胞は伸展されます。収縮期には動脈圧に抗って血液を駆出するため心筋細胞には大きな張力がかかります。つまり、心筋細胞は常に伸展などの力学的な刺激を受けており、それが休むことなく一生涯続きます。つまり力学的負荷のある環境が生理的な環境なのです。近年の機械受容イオンチャネルの研究などからもわかるように、生体内の力学的負荷は細胞機能に影響していることが明らかになってきています。つまり体内で常に力学的負荷にさらされている心筋細胞に起こっていることは力学的負荷下でしか測定しえないのです。顕微鏡下で単離心筋細胞に伸展負荷をかけているとき、私の頭の中ではかつて手術室で働いていた時に見た、例えば大量出血時に急速輸液・輸血を受けて左室容量が増大（心室壁が伸展）し血圧や心拍出量が回復していくシーンが再現されます。つまり、今やっている一見小難しそうに見える心筋力学研究も臨床経験から芽生えた疑問や興味から発展してきたものであり、臨床とは関係のない机上の空論では決してないということです。旭川医科大学の生理学教育を担当するにあたり、生理学の学習と臨床と研究のこのような関係を理解してもらうことによって学生さんたちの研究マインドを醸成し、基礎医学から臨床医学までをシームレスに俯瞰できる医療人を育てていくことに全力を尽くしていく所存です。よろしくご挨拶申し上げます。



教授就任のご挨拶

旭川医科大学
国際医療支援センター

教授 本 間 大

このたび、令和元年11月14日付で、本学、国際医療支援センター教授の職を拝命いたしました。本学はもとより、国内でも例のない新規事業に携わる機会を頂戴し、非常に光栄でありますとともに、大変、身の引き締まる思いです。

私は、網走郡女満別町（現大空町）出身で、本学を1996年に第18期生として卒業いたしました。卒業と同時に、当時、飯塚一教授を主宰とする母校の皮膚科学教室に入局し、24年弱を皮膚科医として勤務してまいりました。最近では、代表的な炎症性皮膚疾患である『乾癬』を中心に診療および研究にあたってまいりました。この乾癬は、開学以来、初代大河原教授、先代の飯塚教授が研究テーマの軸としてきた疾患ですが、この10年間で有効性の高い新規治療法の開発が進み、治療の考え方が大きく変わってまいりました。本学皮膚科では非常に多数の新規薬剤開発治験を実施しており、こうした業務にも携わりながら、各種新規薬剤の特性に触れることができました。この臨床治験の実施には、臨床研修支援センターのスタッフの皆様、また、乾癬の最大の合併症である関節炎の診療においては膠原病内科の先生方を中心に多くの先生方のご支援を頂戴しました。また、今日まで、私が皮膚科医として継続することができましたのも、歴代の飯塚、山本両教授、また皮膚科同門の先生方の大きな支えによるものと、皆様に心より感謝申し上げます。

本学では、1994年以降、遠隔診療を通じ、国内はもとより、各国医師との国際協力体制を築いてまいりました。現在では、国内50施設に加え、米国、中国、タイ、シンガポールの4か国の施設と遠隔医療が実践できる状況にあります。また、わが国では政府が主導する形で国際医療を推進しており、旭川医大

病院も2019年10月に認証機関であるMEJからJapan International Hospitalsとして承認され、インバウンドの受診者の受け入れ体制が徐々に整えられています。この度の国際医療支援センター構想は、本学が培ってきた国際的な医療協力体制を礎に、医療水準が発展途上にある各国の医療従事者（医師、コメディカル）に対し、わが国の先進的な医療について教育するとともに、わが国の医療システムを母国へ持ち帰っていただくことを目的とした新規事業です。このため、海外からの医療スタッフの居住・教育スペースとともに、本学附属病院の手術室・ICUの拡張等、手術機能を向上させることが建設計画に盛り込まれています。各診療科の医師、またコメディカルの方々のご協力をいただきながら、この計画をすすめるとともに、潤滑に調整・運営をすることが、私に課せられた使命と考えております。

現在、わが国は人口減少社会に突入し、この北海道では札幌圏を除き、今後、20-30年の間に大きく人口減少が進むと考えられております。特に本学が位置する道北地域ではこの間に30%前後の住民が減少すると試算されています。このような社会情勢を踏まえ、『地域医療への貢献』という本学の理念を継続して達成するためにも、大学としての独自性を打ち出すこととともに、医療の集約化・効率化を進める必要があります。この国際医療支援センター事業は、本学の存在価値を高め、その魅力を学外へアピールする意味でも非常に重要な計画と考えています。

本事業の計画・運営を遂行するため、微力ではございますが、精一杯努力いたす所存でございます。今後とも、皆様からのご支援、ご指導を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

学部学生海外留学助成制度を利用して

医学科第2学年 山形美月



私は、今年度の夏期休暇を利用して、オーストラリアのシドニーに語学留学をしました。留学の理由としては、医学とは関係なく、英語を語学として学び、多国の人々と英語を介してコミュニケーションをとりたいと思ったためです。

今回の留学はEF-Education Firstという留学会社のプログラムに申し込み、現地ではEF International Language Campusという語学学校に通いました。ここには、世界各地から「英語を学びたい」という意欲を持つ人々が集まっており、授業としては、英語を英語で読み解くというものでした。英語の学習を日本語で行ってきた私にとっては、文法を英語で学習したり、英文を英語でディスカッションしたりというものは最初は難しく感じました。また、学生同士で話していても、それぞれの母国語に影響された独特な発音が理解できなかつたりと、コミュニケーションをとることに苦勞しました。しかし、2週目を過ぎたころからは、他の学生の積極的な姿勢に後押しされたこともあって、ディスカッションでも積極的に発言できるようになり

ました。ほかの学生と話すときにも、理解しやすいように話したり、別の言葉に置き換えたり、お互いがすることで、自然と会話も盛り上がるようになりました。今まで、英語は英語が母国語の人としか話したことがなかったので、自然と相手に理解を求めるような形になっていましたが、今回の留学を経て、相手と同じレベルでの英会話が少しできるようになったのではないかと思います。語学学校の授業以外にも、放課後や休日などはシドニー市街の観光を通して、日常生活の中で英語を使うという経験をすることができました。

今回の留学を通して、4週間という短い期間ではありましたが、初めて現地で頼る日本人がいない中で過ごしたことで、考えずとも使える英語、会話の中で同じレベルで使える英語というものが身についたと感じました。今後は、今回の経験を無駄にせず、英語を「使える」機会を自分から探し、継続して自分の語学スキルを磨き、将来に役立ててゆきたいと思います。

最後になりますが、このような貴重な経験をさせてくださった、学部学生海外留学助成制度によるご支援に心より感謝申し上げます。

「高齢化対策モデル国」デンマークへの臨床留学

医学科第5学年 小山裕基



この度、学部学生海外留学助成制度を活用し、デンマークにある Rigshospitalet Glostrup（コペンハーゲン大学付属 Glostrup 病院）

にて、老年医学科の臨床実習をさせていただきました。留学の目的は、高齢化対策モデル国と言われているデンマークの医療福祉の現場に立って、今後北海道の地域医療に携わる上で役立つような知見を得てくることでした。

実習では、主に老年医学科の病棟管理や一般外来、転倒リスクアセスメントや内分泌、眼科等の専門外来を見学しました。また、訪問看護や理学療法現場、老人ホームを訪問する機会もいただきました。私が最も感銘を受けたのは、高齢者福祉の3原則（生活継続、自己決定、残存能力活用）に基づく、成熟した地域包括ケアシステムの在り方でした。広域な行政区画(Region)内の病院・クリニック・福祉施設が電子カルテを共有するスムーズな連携体制、1日8回まで無料で活用できる介護ヘルパーや、充実した訪問診療・看護の体制、労働法を遵守しながら手厚いサービスを実現する福祉施設の勤務体系など、合理

的で工夫されたシステムに触れる中で良い学びを得ることが出来ました。現役世代、高齢者を問わず「デンマークで生きていて幸せだ」という声が色々な人から聞かれたのがとても印象的でした。

また、多くの素晴らしい方々と知り合うことが出来たことも留学の大きな魅力でした。実習先では、担当して下さった教授をはじめとした医師、看護師、あるいは作業療法士の方々が皆母国語のデンマーク語ではなく英語で指導し、時間を割いて接して下さいました。眼科を見学していた際には、旭川医大を訪問したことがあるという Larsen 教授から声を掛けていただき、少しお話をさせていただきました。また、同じ IFMSA（国際医学生連盟）の交換留学プログラムで世界中から集まった30名ほどの医学生達とつながり、語りあえたのも大きな財産となりました。

今回の留学では、今後の成長の糧となる素晴らしい経験を得ることが出来ました。ご寄附等によりご支援いただいた皆様、今回の留学をサポートして下さった全ての皆様により感謝申し上げます。

学生海外留学助成制度を利用して

医学科第5学年 馬 淵 ゆ り



9月1日から14日までの2週間、フィンランド南西部のトゥルクという街にあるTurku University Hospitalの消化器内科で実習をしました。今回の留学はIFMSAの臨床交換留学制度を利用したもので、以前にもフィンランドを訪ねたことがあり親しみがあつたこと、福祉制度の充実している北欧の医療を見てみたかったことからフィンランドを希望しました。

私は主に朝のカンファレンス、回診、病棟業務、外来での内視鏡検査を見学し、実習最終日には興味をもった症例について短いプレゼンテーションをしました。病棟には肝疾患の患者さんが多く、様々なケースを見て勉強することができましたが、その中で特に印象的だったのは肝移植の症例でした。日本では生体肝移植がほとんどであるのに対しフィンランドでは脳死肝移植が主流であり、移植待機中の死亡数を減らすため、あらかじめ臓器提供を拒否していない限りすべての人をドナー候補とする法改正が数年前に行われています。また、フィンランドを含め北欧諸国では国を超えて移植リストの管理を行っており、緊急に臓器移植を必要としている場合には他国のドナーから臓器が提供されることもあります。病棟にいた患者さんの一人は、移植が必要と判断されてからわずか5日後に手術を受けることができたそうです。移植に対する人々の考え方やシステムの違いはとても興味深いものでした。

フィンランドでは診察記事や検査結果、処方箋などの患者情報を全国の病院間で共有できるシステムが使われており、前の病院での治療内容や経過にアクセスしやすく、とても便利だと感じました。またカルテの入力は音声で行われており、文字起こしは医学生のアライトや専門の職種の人が担当するため、ペーパーワークにかかる時間が大きく短縮され効率よく業務が行われていると感じました。また、これはフィンランドに限らず北欧諸国に共通しているようですが、医師の労働環境が厳しく管理されており、多くの医師は16時には仕事を終えて帰宅し、仕事だけでなく家族や友人との時間を大切にしているそうです。当然一日に診られる患者さんの数は限られるため診察の予約が取りづらくなりますが、その不便さが受け入れられていることはとても新鮮に感じました。

2週間という短い期間でしたが、現地の学生の家滞りし、病院実習に参加し、学生や先生方と関わり、フィンランドの医学生のひとりであるかのように日々を過ごせたことは忘れられない経験になりました。また、英語という一つの言語を学ぶだけで、異なる母語を持つ多くの人々との関わりが生まれ、自分の世界が広がっていくと改めて感じ、今後も勉強を続けていくモチベーションになりました。

最後になりましたが、海外留学助成制度を通してご支援いただきました皆様、私の留学に関わってくださったすべての方々に感謝申し上げます。

第66回北海道地区大学体育大会 結果報告

6月30日(日)から7月21日(日)の日程で第66回(令和元年度)北海道地区体育大会が開催され、旭川市をはじめ札幌市、帯広市、室蘭市、岩見沢市、和寒町及び留辺蘂町の7会場において競技が行われました。今回は、準硬式野球、サッカー、ハンドボール、女子陸上競技、女子剣道の競技が参加大学数不足のため開催中止となりましたが、その他の7種目で20大学から参加した学生らにより熱戦が繰り広げられました。

本学は昨年度に引き続き、バスケットボール大会の分担大学として、7月20日(土)と21日(日)の2日間、和寒町総合体育館及び忠和公園体育館においてバスケットボール大会を開催しました。本学バスケットボール部員達は前日の夕方から準備を始め、大会の2日間は自分達も試合に出場しながらもスムー

ズな大会運営に協力してくれました。試合結果は、男子は第3位、女子は残念ながら1回戦で敗退となりましたが、試合では大きな声を出しながら、強気な姿勢で攻め続けた姿が印象的でした。

また、他の大学にて開催されました競技におきましても、男子バレーボールが見事3年連続優勝、女子バレーボールが第3位、さらに剣道では男子が優勝を果たすことができました。

大会の結果は、旭川医科大学男子が総合優勝という素晴らしい成績を収め、旭川医科大学は大会通算3回目の総合優勝となりました。

来年度も、引き続き皆様のご協力・ご声援をよろしくお願いいたします。

第66回(令和元年度)北海道地区大学体育大会 種目別上位成績表

種目	男子			女子		
	優勝	準優勝	第3位	優勝	準優勝	第3位
総合成績	旭川医科大	北教大札幌	北海道大	北教大旭川	北教大札幌	北教大岩見沢
陸上競技	北海道大	旭川医科大	北教大旭川			
バスケットボール	北教大札幌	小樽商科大	旭川医科大 国学院学短大	北教大札幌	拓殖短大	武蔵女子短大 帯広畜産大
バレーボール	旭川医科大	北教大旭川	北教大札幌 室蘭工業大	北教大旭川	北教大釧路	旭川医科大 武蔵女子短大
バドミントン	北教大旭川	北海道大	北教大函館 帯広畜産大	北教大岩見沢	北教大旭川	北海道大 北教大札幌
剣道	旭川医科大	札幌医科大	北教大札幌			
弓道	北海道大	北見工業大	帯広畜産大			



令和元年度解剖体慰霊式を執り行いました

9月18日(水)午後1時30分から本学体育館において、御遺族と御来賓及び教職員・学生合せて約310名が参列し、令和元年度旭川医科大学解剖体慰霊式を執り行いました。

慰霊式においては、本学学生等の教育及び学術研究用に尊いご遺体を提供され、医学発展の礎石となられた方々の計316霊の御霊に対して、ご冥福をお祈りするために黙とうが捧げられ、引き続き平田副学長から追悼の辞が述べられました。

また、学生代表の医学科第3学年 片田 悠

太さんによる追悼の辞では、『故人そしてご遺族の皆様のお思いを引き継ぎ、教えて頂いたことがらを正しく活用していく責任があります。私たちはそのことをしっかりと胸に刻み、皆様のご期待に応えられる医師となるための努力を今後も重ねていく』と誓いました。

最後に、御遺族と御来賓の方々並びに教職員、学生の代表からの献花が捧げられ、亡くなられた方々の御遺徳を偲びご冥福を祈念しました。

追悼の辞

副学長 平田 哲

学生代表 医学科3年 片田 悠太

献花

副学長 平田 哲

学生代表 医学科3年 片田 悠太

医学科3年 田村 ゆき穂

看護学科2年 小山内 萌

看護学科2年 本間 貴子



学生表彰式

令和元年11月19日(火)午後12時10分から、本学第一会議室において、課外活動又は学術研究活動で特に顕著な成果をあげた学生及び学生団体に対する学生表彰が行われました。表彰式は、役員及び顧問教員の列席のもと、

吉田学長から4団体、個人4名に対し表彰状の授与と記念品の贈呈が行われ、被表彰者の栄誉を称えるとともに、更なる活躍のための激励の言葉が贈られました。受賞者の一覧は以下のとおりです。

== 課外活動による表彰 ==

団体名・氏名	大会等名	成績
バレーボール部男子	第62回東日本医科学生総合体育大会	優勝
	第66回北海道地区大学体育大会	優勝
剣道部女子	第62回東日本医科学生総合体育大会	第3位
ソフトテニス部女子	第62回東日本医科学生総合体育大会	優勝 (3連覇)
ハンドボール部男子	第61回東日本医科学生総合体育大会	準優勝
	第62回東日本医科学生総合体育大会	優勝
医学科第5学年 山崎 誠一郎 (自転車競技部)	第52回北海道自転車競技選手権 ポイントレース 10P	第3位
	第5回かみふらの十勝岳ヒルクライム2018 18歳～29歳 男子	第1位
	第5回かみふらの十勝岳ヒルクライム2018 男子総合	第2位
	第6回かみふらの十勝岳ヒルクライム2019 18歳～29歳 一般男子	第3位
医学科第2学年 駒井 将輝 (陸上競技部)	第62回東日本医科学生総合体育大会 男子走高跳	第2位
	第66回北海道地区大学体育大会 男子走高跳	第1位
看護学科第1学年 宮崎 奈月 (陸上競技部)	第29回道北春季陸上競技選手権大会 女子やり投	第1位
	第71回北海道学生陸上競技対校選手権大会 女子やり投	第1位
	第31回北日本医科学生陸上競技大会 女子やり投 (大会記録)	第1位
	第41回北日本学生陸上競技対抗選手権大会 女子やり投 (北海道学生記録)	第1位
	第84回札幌陸上競技選手権大会 女子やり投げ	第1位

== 学術研究活動による表彰 ==

氏 名	功 績
医学科第5学年 内 田 紗瑛子	令和元年6月6日～8日に開催された「第31回日本老年学会総会」に演題を応募し、日本老年学会、日本基礎老化学会との合同学会演題の中から、優秀な12演題の一つに選ばれ、選抜された優秀な医師や研究生らが発表する中、質疑応答も含めて、非常に素晴らしい講演発表を行い、「合同ポスター賞」を受賞した。また、貴重な研究知見を見出すと共に、全国学会において、研究成果と講演発表に高い評価を獲得した。

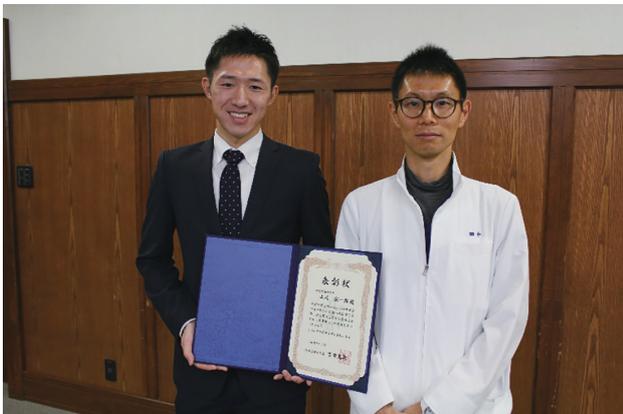


● 団体受賞者（課外活動）





●個人受賞者（課外活動）



●個人受賞者（学術研究活動）



旭川医科大学基金
NEWS



旭川医科大学基金「感謝の集い」を開催しました

令和元年11月22日に旭川医科大学基金の寄附者の皆様をお招きした「感謝の集い」を旭川医科大学病院内のレストラナななかまどを会場として開催しました。

平成28年10月の旭川医科大学基金創設後、3回目の開催となる「感謝の集い」には、寄附者の皆様とご同伴者様を併せ28名の方々にご参加をいただき、本学からは理事、副学長などの大学役職員の他、基金の支援を受けた学生・留学生及び若手研究者も参加しました。

はじめに名誉会員の寄附者様へ感謝状を贈呈いたしました。また、藤尾理事から寄附者の皆様へご挨拶の後、原渕学長補佐から寄附金の活用及び収支状況等についての報告を行いました。

平田理事による乾杯で幕を開けた寄附者の皆様との歓談時間には、支援を受けた学生・留学生及び若手研究者から活動成果報告が行われ、日ごろのご支援に対する感謝の気持ちを伝えることができました。最後に、原渕学長補佐の閉会の挨拶の後、盛会のうちに終了いたしました。



名誉会員の寄附者様と本学役職員

クレジットカード決済での継続的なご寄附（定期自動引き落とし）がお申込みいただけるようになりました

以前よりご要望をいただいておりますが、クレジットカード決済により継続的に定額のご支援をいただくことが可能になりました。

一度お申込み頂くと、翌月からの手続きは必要なく、毎月自動で任意の金額をご寄附頂けます。旭川医科大学への末永いご支援をいただけますようご検討いただけましたら幸いです。

※詳しくは旭川医科大学基金ホームページをご覧ください。→

旭川医科大学基金ホームページ

URL (<https://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?#=guide+funds>)

旭川医科大学基金 検索



学生団体代表者との懇談会を実施しました

12月5日(木)17時00分から第6講義室において、体育系40団体、文化系36団体、合計76団体の各代表者及び学生会長との懇談会を実施しました。この懇談会は、課外活動を行ううえで注意してもらいたい事項や、守るべきルールやマナーについて再認識してもらい、部員に周知徹底してもらうこと、同時に、学生からの要望や意見を把握することを目的として開催され、大学からは、西川教務・厚生委員会委員長と川村保健管理センター長が参加しました。

特に注意してもらいたいこととして、未成年の飲酒禁止や自宅アパートで飲み会を開催して近隣住民に迷惑をかけないこと、SNS利用上の注意等、最近問題となっていることが取り上げられました。

また、医療者を目指す学生が問題を起こした場合には、社会的に大きく取り上げられる可能性が高く、今一度、一人一人が自分たちの行動を見直すよう注意喚起がなされました。

大学からの主な注意事項は以下のとおりです。

1. 学外でのルール・マナー

- ・自宅アパートでの近隣住民への迷惑行為は行わないこと
- ・近隣店舗での迷惑行為は行わないこと
- ・遠征での公共交通機関を利用する際は、節度ある行動をとること

2. 学内でのルール・マナー

- ・屋内での走行練習での衝突事故の防止
- ・構内での駐車場利用ルールを守ること

3. 団体内での配慮について

- ・部員への活動参加は強制しないこと
- ・未成年の飲酒については絶対させないこと
- ・医療者を目指す者として、部員の体調や試験前の活動について配慮すること

4. 病院でのルール・マナー

- ・院内ローソンイートインコーナーやスターバックスコーヒー等では、病院利用者へ配慮した行動をとること
- ・患者情報の取扱いについては十分注意すること

5. インターネット掲示板、SNS等の利用について

- ・特性や自ら負うべき責任を認識すること



ギター部・ジャズ研究会合同 クリスマスコンサート

12月1日(日)13時よりギター部とジャズ研究会によるクリスマスコンサートが病院ロビーにて行われました。ギター部ではクリスマスにちなんだ、「クリスマスソング/ Back number」や患者さんの年齢層に合うような「遠くで汽笛を聞きながら/アリス」などを演奏しました。またジャズ研究会では、ジャズのスタンダード曲である「枯葉」を含む他

数曲を披露し、最後は患者さんからアンコールをいただき、「Bags Groove」という曲を聴いていただきました。

患者さんとの音楽交流を通じて、会場全体は温かい雰囲気になりました。部員一同、改めて音楽の素晴らしさを感じることができました。

ギター部 部長 八柳 周



室内合奏団 クリスマスコンサート

去る12月7日(土)、大学病院玄関ロビーにて、クリスマスコンサートを開催しました。今回は1年生から6年生まで総勢30名と、多くの団員が参加しました。『サンタが街にやってくる』『戦場のメリークリスマス』といったクリスマスソングをはじめとして、クラシックからポップスまで様々な、全6曲を演奏しました。また、メインステージの合間には、クリスマスにちなんだ仮装をした団員が、クリスマスソングの演奏に合わせてアトラクションを披露し、みなさんにクリスマ

スの楽しい雰囲気をお届けしました。有志による小編成での演奏にも多くの団員が挑戦し、一人一人が大きな成長を遂げる機会にもなりました。

たくさんの方にご来場いただき、また、多くのあたたかい声をいただき、ありがとうございました。団員一同の、何よりも大きな励みとなっています。今後とも、皆さまに楽しんでいただける音楽をお届けできるよう、日々の活動に励んでまいります。

室内合奏団 団長 後藤 太一



ブラスアンサンブル クリスマスコンサート

12月8日（日）14時から病院玄関ロビーにおいて、ブラスアンサンブルのクリスマスコンサートを開催しました。1部では3年に1度のOB演奏会を兼ねて14名のOBの方と「アルヴァマー序曲」「アラジンメドレー」を演奏しました。また、3部では「情熱大陸」「嵐メドレー」などの元気で楽しい曲をたくさん演奏し、サンタやトナカイに扮した1年生によるダンスやプレゼントもお届けしました。0部と2部では有志によるアンサンブルを演奏しました。来場していただいた方には手拍子や歓声で、演奏をより一層盛り上げていただきました。

天候の悪い中、今年もたくさんの方に足をお運びいただき0部のアンサンブルからアンコールの「宝島」まで大盛況でした。本当にありがとうございました。

今後ともブラスアンサンブルをどうぞよろしくお願い致します。

ブラスアンサンブル 部長 寺田 風花



合唱部 クリスマスコンサート

12月15日(日)13時半より、病院玄関ロビーにて合唱部クリスマスコンサートを行いました。今年は2部から構成され、第1部では毎年恒例の「クリスマスメドレー」で一年生がダンスを披露、「銀河鉄道999」では指揮者の熱のこもった指揮で会場を沸かせました。16名からなる卒業生ステージでは「ガ

ーネット」を歌いました。第2部では組曲「かなしみはあたらしい」を披露。多くのお客様を前に、今年の活動の集大成となる演奏ができたと思います。今後も皆様の前で良い合唱を披露できるよう、練習に励んでいきます。

合唱部 部長 野口 博人



安否確認システムによる訓練を実施しました

「津波防災の日（11月5日）」を中心とした期間に、安否確認システムを導入している道内の国立大学と合同で、学生・教職員を対象に「安否確認システム」による訓練を実施しました。

本学では危機管理体制の強化を図り、災害、犯罪被害、弾道ミサイル発射などの危機等発生時における学生及び職員の負傷の状況や安否情報を収集する一手段として、携帯電話・スマートフォンのメール機能を利用した「安否確認システム」を平成26年度から導入しています。

今回の訓練は、安否確認システムに登録してあるメールアドレスに訓練用の安否確認メールが配信され、回答用のURLをクリックし、Webから安否状況を回答してもらうというものです。

実際に災害が起こった場合には、皆さんから送信された安否状況の回答は、大学に送信されると共に、登録してある保護者アドレスにも送信されます。連絡のとれる可能性の高い携帯電話のメールアドレスを登録する、教育用メールアドレスを登録している場合は転送設定を行う等、常に確認できるようにしておいてください。

また、保護者の方につきましても、携帯の迷惑メール対策で指定受信設定をされている際は、@anpi.mailds.jp 及び @asahikawa-med.ac.jp のドメイン指定受信設定をされるようお願いいたします。

なお、安否確認システムの詳細は、<http://www.asahikawa-med.ac.jp/bureau/shomu/local/anpi/> をご参照ください。

迷惑行為の防止について

本学の近隣に居住している方々から、頻繁に以下のような苦情が入っています。ごく一部の学生の迷惑行為によって、本学学生全体の評価を下げてしまうことになりかねません。今一度本学学生であることを自覚して、近隣に居住している方々の平穏・安全を害することが無いよう配慮ある行動を心がけてください。

なお、迷惑行為の度合いによっては、懲戒処分の対象となりますので、大学として厳正に対処します。

【過去の事例】

- ・ 住宅の敷地や住宅地の共有部分に迷惑駐車をする者がおり、居住の平穏・安全が乱されている。
- ・ 自宅アパートで奇声をあげたり大声で飲み会を開催する者がおり、居住の平穏・安全・睡眠が乱されている。
- ・ 自宅アパートの駐車場や隣接する道路において、嘔吐したまま放置する者がおり、不快な思いをしている。

事故防止について

冬は天候が変わりやすく道路状況や周辺環境が一気に変化します。帰省や移動の際は交通事故に注意し、冬山に立ち入る場合には、事故に巻き込まれないよう、事前の情報収集を行うことが必要です。また飲酒等では法律を守り、他人に迷惑を掛けない範囲で楽しむようにしてください。本学の学生である自覚を持ち、以下のことに注意して、充実した学生生活を過ごしてください。

1. 交通事故について

冬道の運転は、凍結路面やわだちでのスリップ等、危険がいっぱいです。運転する際は、自身の運転技術を過信せず、時間等に十分に余裕をもって安全運転を心がけましょう。また、体調不良時の運転や、他人の自動車への安易な同乗は避けるなど、事故を起こさない、事故に遭わない対策を講じてください。

2. 飲酒運転の禁止

飲酒運転は悪質な犯罪であるとの認識をしっかりと持ち、二日酔い運転を含めた飲酒運転の根絶を図りましょう。飲酒した人の車に同乗したり、車を運転する可能性がある人への酒類の提供や車の提供も犯罪となります。

3. イッキ飲み・アルハラの禁止

未成年の飲酒やイッキ飲みの強要、意図的な酔いつぶしは、非常に危険な行為であることを認識し、絶対に行わないでください。

～アルハラの定義5項目～（イッキ飲み防止連絡協議会のページより）

① 飲酒の強要

上下関係・部の伝統・集団によるはやしたて・罰ゲームなどといった形で心理的な圧力をかけ、飲まざるをえない状況に追い込むこと。

② イッキ飲ませ

場を盛り上げるために、イッキ飲みや早飲み競争などをさせること。

③ 意図的な酔いつぶし

酔いつぶすことを意図して、飲み会を行うことで、傷害行為にもあたる。ひどいケースでは吐くための袋やバケツ、「つぶれ部屋」を用意していることもある。

④ 飲めない人への配慮を欠くこと

本人の体質や意向を無視して飲酒をすすめる、宴会に酒類以外の飲み物を用意しない、飲めないことをからかったり侮辱する、など。

⑤ 酔ったうえでの迷惑行為

酔ってからむこと、悪ふざけ、暴言・暴力、セクハラ、その他のひんしゆく行為。

4. 薬物乱用の禁止

昨今「危険ドラッグ」の乱用は大きな社会問題となっています。好奇心や誘惑から、薬物（ドラッグ）を買わない、使わない、かかわらないという強い意思を持ってください。

大学構内における駐車について

今季の初雪は平年に比べて2週間も遅く観測された旭川市ですが、これからどんどん雪深くなっていくことでしょう。

さて、雪が降ると毎年話題に挙がるのが、駐車場問題です。

大学駐車場の区域線が雪に隠れてしまい、線に従って駐車することが難しくなっています。許可車両にて通学している学生は、車両間隔を詰めて駐車するよう協力願います。

また、大学から何度も注意喚起を行っているにもかかわらず、駐車禁止場所への駐車や、路上駐車が後を絶ちません。

すべてが学生の所持している車両とは言えませんが、確実に学生が運転している車両も数多くあり、そのほとんどが不許可車両であるのが現状です。

そもそも、本学は公共交通機関を用いての通学を基本とし、自家用車で通学は、一定の要件を満たし、かつ、駐車場管理委員会により許可された車両しか本学駐車場を利用できないルールがあります。

また、大学中央玄関前などの駐車禁止区域は理由があって駐車禁止にしていますし、本学構内は緊急車両が走行する可能性が高いので、路上駐車は迷惑極まりない行為です。

過去には、不適切な駐車場利用等により、嚴重注意を行った事例もあります。

平日夜間や土日祝日専用のパスカードは、平日日中のパスカードより安価で購入でき、通学距離等の許可要件もありませんので、そういった制度を有効に活用願います。

なお、パスカードの購入を希望される方は、学生支援課学生総務係に一度ご相談ください。

教 員 の 異 動

令和元年 8月31日	辞 職	放射線科	講 師	佐々木 智 章
令和元年 9月 5日	配置換	病院遺伝子診療カウンセリング室	教 授	蒔 田 芳 男
令和元年10月 1日	採 用	医学部生理学講座(自律機能分野)	教 授	入 部 玄太郎
令和元年10月10日	配置換	医学部生理学講座(神経機能分野)	教 授	高草木 薫
令和元年11月14日	昇 任	病院国際医療支援センター	教 授	本 間 大
令和元年11月14日	配置換	医学部生理学講座(神経機能分野)	准教授	千 葉 龍 介
令和元年11月14日	配置換	医学部外科学講座(血管・呼吸・腫瘍病態外科学分野)	准教授	齊 藤 幸 裕
令和元年11月30日	辞 職	病院眼科	講 師	十 川 健 司

今後のスケジュール

【冬季休業】

医学科第1学年、看護学科第1学年	12月16日(月)～1月14日(火)
医学科第2学年、看護学科第2学年	12月16日(月)～1月14日(火)
医学科第3学年	12月16日(月)～1月3日(金)
看護学科第3学年	12月9日(月)～1月3日(金)
医学科第4学年	12月30日(月)～1月10日(金)
看護学科第4学年	12月9日(月)～1月3日(金)

※事務局は、12月28日(土)から1月5日(日)まで休業します。

1月9日(木)	医学科第4学年 白衣式
1月17日(金)	大学入試センター試験設営
1月18日(土)・19日(日)	大学入試センター試験
2月8日(土)～9日(日)	医師国家試験
2月13日(木)	助産師国家試験
2月14日(金)	保健師国家試験
2月16日(日)	看護師国家試験
3月25日(水)	学位記授与式
4月6日(月)	入学式